念願の日本訪問

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

法王念願の日本訪問

フランチェスコ法王は、古い伝統を有すると共に近代科学技術国家である日本を自分の目で確認するのが若い頃からの夢だった。このたび、32回目の司牧の旅として、2019年11月下旬、タイと日本を訪れた。両国ともカソリックの広布率は1％以下で、カソリックの伝播としては両国とも後進国に属する。それゆえ、現法王はカソリックの長として、両国の土を踏むのではなく、一伝道師になって両国の土を踏む思いで出かけた。

法王は11月23日夕刻、タイから羽田空港に到着した。翌日からは分刻みの日程で、高齢の法王の体力がよく続いたものだ。翌24日早朝には、長崎行きの飛行機の中にいた。長崎ではカソリック関係の人々に会い、隠れキリシタンに関係する教会を訪ね、また一般公開ミサを行った。法王は、これらのことに関してよく勉強しており、またヴァチカンで行われる毎週日曜日のアンジェルスの講話の中で、長崎や広島の原爆のこと、長崎の隠れキリシタンについて述べたこともある。

長崎では核爆弾の使用を糾弾したが、その日の夕方には、世界最初の原爆被害地の広島に移動していた。広島はもう暗くなっており、原爆ドームをよく眺めることもできなかった。平和公園では、日本の各宗教の代表者と握手を交わした。広島での講演でも核爆弾について糾弾。日本に投下された原爆は人類に対する挑戦でもあると宣言した。そして夜遅くに東京へ戻った。

25日には、2011年の東日本大震災の被災者たちと面会して激励し、その後で安倍晋三首相に会い、天皇にも謁見している。法王はこの時、核開発について言及。エネルギー源としての核開発という道は、福島の原発事故からも分かるように、将来性がないと述べた。

東京スタジアムでの一般公開ミサには5万人の人が集まった。これには日本のカソリック信者のみならず、近隣諸国のカソリック信者や日本の異教徒の人たちも数多く参集した。法王は若者について、若者は明日を夢見て進まねばならないと発言。近代国家日本に、なぜ自殺が多く、“ひきこもり”や“いじめ”が多いのだろうかと問いかけた。

日本滞在最終日の26日には、イエズス会の大学、上智大学を訪問した。法王もイエズス会の会員の一人だ。上智大学の総長を務めた後、ローマに戻ってグレゴリアン大学の総長になり、さらにヴァチカンの教育省長官となったピタウ大司教は定年後、再び東京に戻り、そこで人生を全うした。法王は、このことを、日本の国としての良さと日本人の人間性の高さに由来すると評価した。

法王、プレゼーピオ（presepio）の発祥の地へ

法王の名前の由来になった聖フランチェスコは、かつてイタリア中部のリエティを訪れた際、その近くのグレッチョの街で、サビーニ山脈に沿った奥行き700メートルの洞窟を見つけた。彼は、その一番奥の壁に、ルネサンス初期の画家ジョット風のキリスト誕生場面を描かせた。これが、1223年にできたイエスの誕生を祝う飾り物であるプレゼーピオの元祖だ。2019年12月1日そこを訪れた法王は、「プレゼーピオを通して、イエスは色々と訴えている。人間は兄弟の世界を目指して進むべきだ。そこでは、誰も排除されないし、隅に追いやられることもない」と述べた。また、「プレゼーピオを作ることによって、小さい時から、両親や祖父母を通して、この喜ばしい出来事を、楽しい思い出を生涯持ち続ける」、「小さい時から神の子の貧しさを感じ、貧しさに触れることで、蘇ったキリストに会えるし、兄弟に慈悲の思いを持つことができる」などと語った。

献納金が投資金に回った

法王への献納金は、毎年6月29日の聖ピエトロ・パオロの日の前後に、末端からカソリック共同体を通して献納されるが、その額は年々減少している。2013年には84億円から96億円あったが、今では60億円ぐらいだ。決算報告書の類は皆無のため詳細は明らかではないが、法王庁とヴァチカン国にある財産は、一説には840億円を超えているという。その金は主にヴァチカン市国の管理、修理、運営に使われている。支出は年間あたり約132億円ほどである。そこには、債権の購入、不動産の購入、学校教育なども含まれ、さらに世界中の教会、学校、病院などにも支出されている。

法王への献納金はヴァチカン市国の国家秘書室が管理している。2013年より現枢機卿でローマ法王の秘書役ピエトロ・パロリンが長となっている。その下で、2011年～2018年までアンジェロ・ベッチュー（現枢機卿）、現在は2018年10月よりヴェネズエラ出身のエドガー・ペーニャが業務に携わっている。

すべての不測の歩みは2012年に始まった。ベッチューは以前アンゴラのヴァチカン大使を務めていた。その間、現地の投資家アントニオ・モスキートと友達になった。彼からベッチューは2億ドルをファルコン・オイルに投資するように勧められる。交渉の結果、ヴァチカンは投資家の一員となった。わずか5％の投資比率だったが、最終的にこの投資はうまく行かなかった。

次に、ロンドンに居住する財政家で、イタリア人のラファエレ・ミンチョーネが登場する。これには、法王への献納金の管理を任されているスイスの信用金庫が関与している。ミンチョーネはヴァチカンの銀行業務を担当するクラッソ秘書官に言った。「あなた方は、銀行に預けてあるお金を倍にしたくはないか。もし、そうならば、私が持っているロンドンの中心街にあるビルを購入したらどうだ」。そのビルはかつてハロッズの本部でもあった建物で、場所はスロアン・アヴェニュー60番地だ。ヴァチカンはミンチョーネが管理していた2億円の使用を彼に任せた。しかしこの金額ではビル全体の45％しか購入できない。残り55％を補うために、ジェノヴァ貸付銀行、レトリト銀行やタス銀行を使用した。その間にビルの値段は上がっていった。そこへイギリスのEU離脱問題が出てきて、さらに値が膨らんだ。

このようにして、ヴァチカンはこのビルに大金を払い込む不覚を犯してしまった。そのあと、仲に入った人間が悪かった。その名前はジャン・ルイジ・トルツィ。彼はロンドンに住むイタリア・モリザーノ出身のブローカーである。ビルは2018年11月23日ミンチョーネからルクセンブルグの会社グットゥ（GUTT）の所有に変わった。2019年5月には、さらに新しい会社のものになってしまった。ヴァチカンはビルを所有するために、トルツィに12億円、ミンチョーネに48億円を払い込み、他にも支払いをせざるを得ず、結局ヴァチカンの利益はゼロになってしまったのである。